



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	入試に関する定期調査の立案と実施 : 高等学校等関係者との良好な関係作りを目指して
Author(s)	岩間, 徳兼; Iwama, Norikazu
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 29, 121-127
Issue Date	2022-03
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.29.121">https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.29.121</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/84357">https://hdl.handle.net/2115/84357</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	HighEdu_29_121.pdf



# Planning and Implementation of Regular Surveys Related to University Entrance Examinations: Aiming to Build a Good Relationship with High School and Secondary School Officials

Norikazu Iwama\*

Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University

## 入試に関する定期調査の立案と実施 —高等学校等関係者との良好な関係作りを目指して—

岩間 徳兼\*\*

北海道大学高等教育推進機構

*Abstract* — High schools and secondary schools are major stakeholders in university entrance examinations. In order for the examinations to function properly, it is desirable for those schools and the university to understand each other's activities and have a good relationship. This time, I planned regular surveys to achieve this. I gave them an interface function for exchanging opinions. In this paper, I report on the preliminary survey and the first main survey conducted in 2021. In the preliminary survey, I checked whether the purpose of main surveys would be acceptable by the school officials and confirmed several points that might cause problems in the implementation of the main surveys. The first main survey was conducted by utilizing the results of the preliminary survey, and no major problems were found in the implementation.

(Accepted on 4 January 2022)

### 1. はじめに

大学入試は受験者のみならず様々な方面へ大きな影響を与える。近年では文部科学省による大学入学者選抜改革の動きの中で、大学入学共通テストや各大学の個別入学試験の動向が社会的な関心事ともなった。

試験に関する実務や研究の文脈において、個人、

組織、グループに対する試験の結果の重要度はしばしばステークスと言及される (American Educational Research Association et al. 2014)。特に、大学入学試験の様に重要度が高い試験はハイステークステストと呼ばれる。ハイステークステストにおいては、テストへの合格や高い得点の取得による動機付けを背景として、テストが受験者や教育機関、それら関係者を含む社会に与える影響、つまり波及効果を気に

\*) Correspondence: Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, Japan  
E-mail: iwama@high.hokudai.ac.jp

\*\*\*) 連絡先：060-0817 札幌市北区北17条西8丁目 北海道大学高等教育推進機構

かけて置くべきである。

大学入試には、主なステークホルダー（利害関係者）として、高等学校および中等教育学校（以降、高等学校等）やその関係者が存在する。大学入学試験の波及効果として、学校での学習内容や指導内容に影響を与える可能性は十分にあり、現に入学者選抜実施要項には「高等学校（中等教育学校の後期課程及び特別支援学校の高等部を含む。）における適切な教育の実施を阻害することとならないよう配慮する」と明記されている（文部科学省 2021）。

試験を実施する大学側として、悪い波及効果を与えることなく、大学入学試験を適切に機能させるためには、大学入試に関して大学が行っている様々な活動や高等学校等で行われている活動について情報交換をするなどして高等学校等関係者との間で良好な関係を築いておくことが望ましい。とはいえ、そのために実際に高等学校等に訪問するなどの方策を取ることは時間的、経済的にも難しいのが現実である。そこで今回、そのような機会を創出する試みとして、高等学校等との間での意見交換のインターフェイスとなるような調査を立案し、予備調査と第一回本調査を実施した。その際、

- ・学校としての意見でなく、進路指導に携わる者の個人的で率直な意見を得る
- ・年間で複数回の機会を設ける
- ・回答者に負担をかけない
- ・回答から結果報告まで時間をかけない
- ・一方的に回答を得るだけでなく、調査主体からの応答を行う

の点を重視した。

## 2. 予備調査

予備調査では、翌年度に行う予定の本調査の趣旨を提示し、趣旨への賛同が得られるかどうかを確認するとともに、本調査実施に向けて諸々の条件の確認、問題点の洗い出しをすることを目的とした。

### 2.1 調査対象

過去の北海道大学の受験者数をもとに、全国 126

の高等学校等（道内 34 校、道外 92 校）の進路指導担当者を対象とした。

### 2.2 調査内容

調査内容は表 1 に示した通りである。回答者の属性や回答者の所属先に関する情報を得るための質問（Q1 から Q6）、本調査の趣旨への賛同とその理由を確認する質問（Q7, Q8）、本調査の実施形式を確認する質問（Q9 から Q12）、本調査で扱う内容やその回答可能性を確認する質問（Q13, Q14）、回答における端末やアクセスに関する質問（Q15, Q16）、調査に対する意見や要望を求める質問（Q17）で構成した。なお、Q13 では、新型コロナウイルスに対する大学の入試対応、新しい調査書、観点別評価、入試における多面的総合的評価、大学入学共通テスト、北海道大学の入試内容、北海道大学の広報活動、進路指導における北海道大学の扱い、進路指導の苦慮、新学習指導要領、コンピテンス基盤型教育、カリキュラムマネジメント、アクティブラーニング、探究活動の 14 項目を取り上げた。

### 2.3 調査方法

調査対象者に予備調査への回答依頼書を郵送し、Google フォームによる Web 回答フォームから回答を収集した。調査は 2021 年 3 月 16 日から 3 月 31 日に行った。

### 2.4 調査結果の概要

全体回収数は 43 件（回収率 34.13%）で、道内が 20 件（58.82%）、道外が 23 件（25.00%）であった。以下に、主な質問に関する結果を記述する。

まず、Q7 では、以下の内容を示した上で、趣旨へ賛同してもらえるかどうかを尋ねた。

---

調査の趣旨・概要：

地理的、時間的な難しさを乗り越えて、入試に関連する事柄について高等学校等の関係者から有益な情報を得るため、年数回、定期的に Web 調査を行っていきたいと考えています。また、この調査をイン

表 1. 予備調査の質問項目

ラベル	質問内容	回答形式
Q1	ご所属 (学校名)	記述
Q2	ご役職	記述
Q3	ご連絡先 (メールアドレス)	記述
Q4	勤務されている学校では、北海道大学に進学を希望する一年生 (もしくは、高等学校一年相当生) は平均して毎年何名くらいいらっしゃいますか	選択
Q5	勤務されている学校では、北海道大学に進学を希望する二年生 (もしくは、高等学校二年相当生) は平均して毎年何名くらいいらっしゃいますか	選択
Q6	勤務されている学校では、北海道大学に進学を希望する三年生 (もしくは、高等学校三年相当生) は平均して毎年何名くらいいらっしゃいますか	選択
Q7	調査の趣旨に賛同していただけますか	選択
Q8	そのように考える理由は何ですか	記述
Q9	一回あたりの質問票への回答時間はどれくらいまでであれば負担に感じないですか	選択
Q10	一年あたりの質問票への回答回数はどれくらいまでであれば負担に感じないですか	選択
Q11	来年度実施予定の本調査へ協力した結果として、どのようなフィードバック情報が得られるとよいですか	記述
Q12	フィードバック情報はどのような形式で得られるのが望ましいですか (複数選択可)	選択
Q13	来年度実施予定の本調査において、以下の項目について評価や意見を求められた場合、回答することができそうですか	選択
Q14	前問のいずれかの項目について、「詳しい校内関係者に聞けばできそう」と答えた場合、それはどのような役職の方を想定しますか	記述
Q15	来年度実施予定の本調査へ回答をする場合、以下のうち、いずれの端末を使用しますか	選択
Q16_a_1	使用する端末の種類はどれですか (複数選択可)	選択
Q16_a_2	ご所属校の端末でのアクセスにはどのような制限がありますか	記述
Q16_a_3	ご所属校の端末で以下の URL に接続して、ページが表示されますか	選択
Q16_b_1	使用する端末の種類はどれですか (複数選択可)	選択
Q17	今回の予備調査や来年度実施予定の本調査に対して意見や要望等がありましたらご自由にお書きください	記述

ターフェイスとして、北海道大学と学校関係者との良好な関係作りにつなげたいと思います。そのため、調査の都度、結果を即時にお返しし、調査や関連する事柄について双方の意見・要望が伝えられるような形をとります。

なお、調査は北海道大学アドミッションセンターの活動とは無関係です。学校としての公式な回答というより、回答者個人の率直な意見・要望が聞けることを期待しています。

調査内容としては主に以下を扱う予定です。

- ・高等学校等における教育および進路指導に関連する問題に対する意見
- ・北海道大学の入試および広報に対する評価や意見

結果は図 1 の通りであった。そもそも回答行動をとるか否かが回答内容に影響を与えている可能性はあるものの、回答者に限ればほとんどが趣旨に賛同すると答えた。

続いて、Q9 と Q10 では、本調査におけるフォー

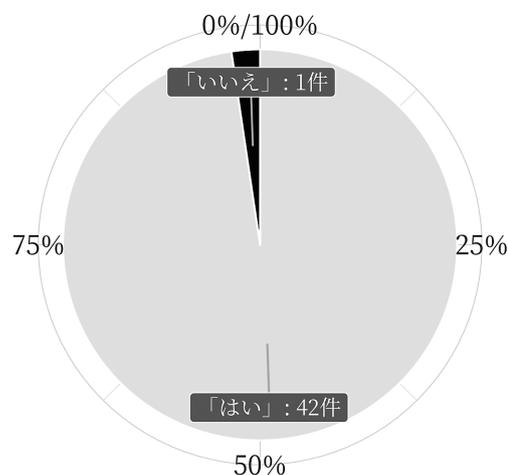


図 1. 調査趣旨への賛同

ムへの回答時間および年間での調査回数について尋ねた。回答時間については 5 分が半数を超え、10 分と合わせて 93.02% を占める結果であった (図 2)、そして、年間での調査回数は 2 回が 60.47%、次いで 4 回が 18.60% であった (図 3)。趣旨のもとでは、一調査あたり長くても 10 分、一年度あたり多くても 3 回の調査で実施することが適当であると考えられた。

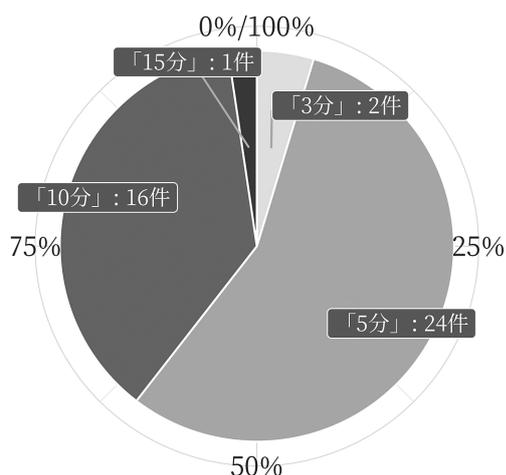


図2. 一調査あたりの回答時間

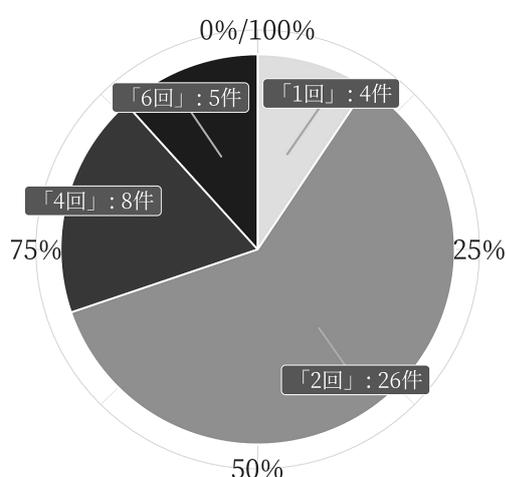


図3. 一年度あたりの調査回数

最後に、Q13では、本調査で扱う可能性の高いトピックについて、調査回答者や校内関係者による回答が可能かどうかを確認した。結果を図4に示す。結果をみると、道内と道外で回答可能性にそれほど大きな違いはなく、回答可能性が高いトピックとして、「新型コロナウイルスに対する大学の入試対応」、「大学入学共通テスト」、「進路指導における北海道大学の扱い」、「進路指導の苦慮」、あまり高くないトピックとして、「観点別評価」、「コンピテンス基盤型教育」が認められた。

## 2.5 調査報告書の作成

本調査は定期的に行う予定であり、その都度、報告書の作成が発生すること、また、インターフェイスとしての調査の性質上、あまり時間をかけずに調査の報告書を返すことを念頭に置き、動的レポート(高橋 2014)の形式で報告書を作成した。

作成には、主に統計解析ソフトウェア R を利用し、質問項目に関するファイル、高等学校等のコードに関するファイルを別途用意し、報告書ファイル生成の処理の過程でその内容を適宜読み込んで利用し、手動での入力を極力減らすようにした。図の挿入や表組みといった作業も自動で行われる。

報告書の構成は

1. 調査概要
2. 集計結果およびコメント
3. おわりに

とし、2. では結果に対して調査主体からのコメントを記述することとした。特に、自由記述の質問についてはいくつかの回答に対してコメントを返すこととした。なお、調査主体からのコメントも別ファイルとして用意し、回答との対応づけなども含めて、自動的な処理を行うこととした。3. では調査全体についての感想や入試に関する情報の提供を行い、意見交換の素地とするべく工夫を行った。

## 3. 第一回本調査

予備調査の結果、2021年度は二回の調査を行うこととし、第一回の本調査では、北海道大学の入試に対する認知や評価を尋ねる質問を主に扱った。また、アクセシビリティの向上のため、Web 回答フォームのみならず Excel で作成した回答フォームによる回答も可能にした。

### 3.1 調査対象

過去の北海道大学の受験者数をもとに、全国 224 の高等学校等(道内 48 校、道外 176 校)の進路指導担当者を対象とした。

### 3.2 調査内容

調査内容は表 2 に示した通りである。予備調査の結果に基づき、5分から10分程度の回答時間を想定した質問の量とした。

回答者の属性や回答者の所属先に関する情報を得るための質問(Q1からQ3)、北海道大学の入試に対

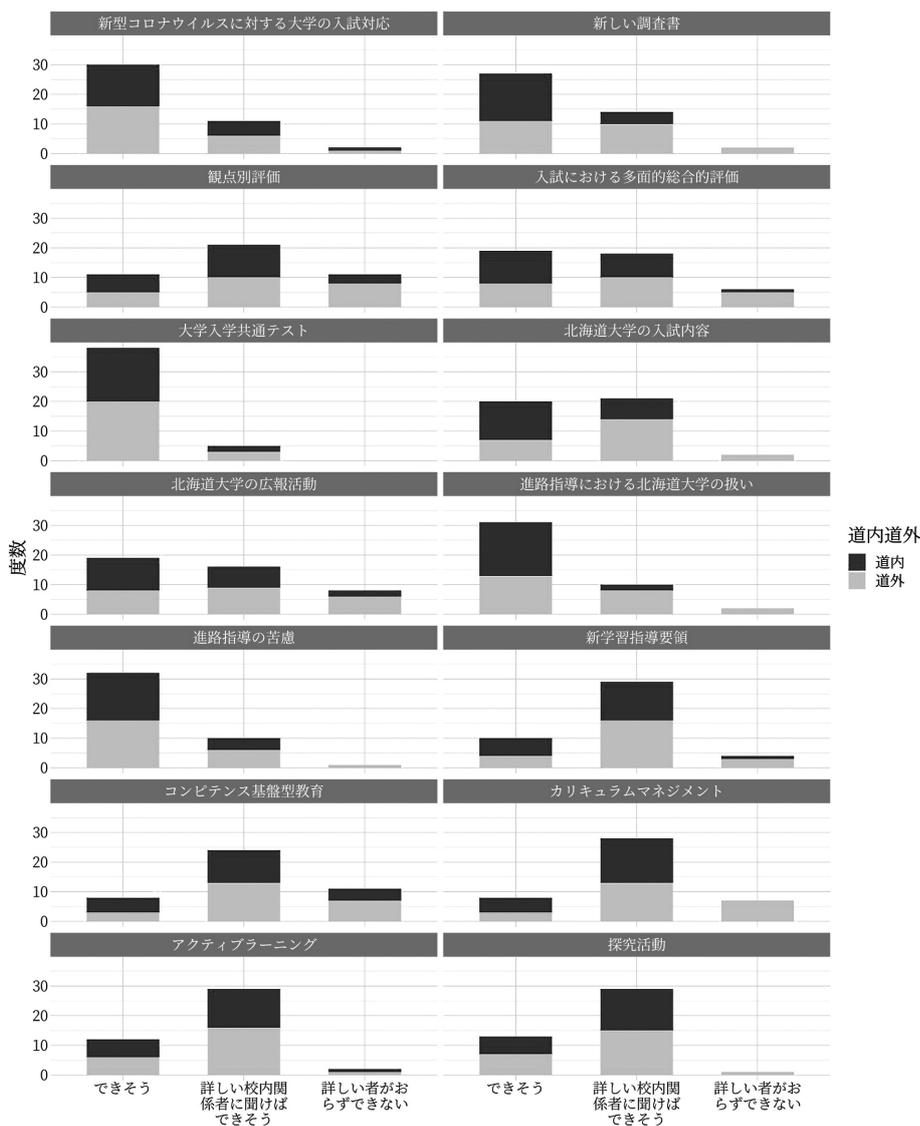
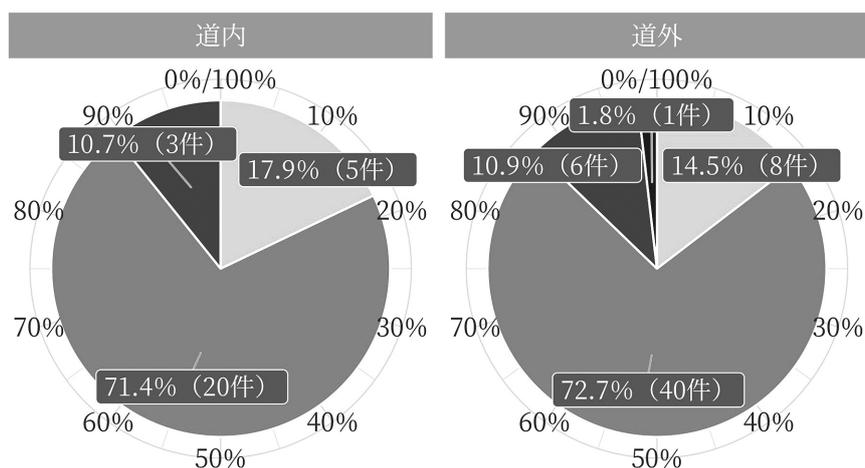


図 4. トピックへの回答可能性

表 2. 第一回本調査の質問項目

ラベル	質問内容	回答形式
Q1	ご所属校の所在地	選択
Q2	ご所属校	選択
Q3	連絡先（メールアドレス）	記述
Q4	北海道大学の入試について知っていますか	選択
Q5	北海道大学の入試においてよい点はどこですか	記述
Q6	北海道大学の入試において改善が求められる点はどこですか	記述
Q7	北海道大学の入試について今後知りたいとすれば、それはどのような内容ですか	記述
Q8	昨年度に行われた北海道大学の入試について、ご意見があればお書きください	記述
Q9	各大学の入試を評価するよう求められた場合、どのような観点から評価しますか。観点を読点（、）かカンマ（、）で区切って列挙してください	記述
Q10	今回のアンケートにおける質問の量は適切でしたか	選択
Q11	原則として調査のフィードバックは PDF ファイルのメール送信で行います。特別な事情で紙媒体でのフィードバックを希望される場合は「紙媒体でのフィードバックを希望」を選択してください	選択
Q12	調査に対して意見や要望等がありましたらご自由にお書きください	記述



全くそう思わない
  あまりそう思わない
  そう思う
  非常にそう思う

図5. 質問量の適切さ

する評価や意見を求める質問 (Q4 から Q8), 大学の入試に対する評価の観点を尋ねる質問 (Q9), 調査の質問量に関する質問 (Q10), フィードバックの希望に関する質問 (Q11), 調査に対する意見や要望を求める質問 (Q12) で構成した。

### 3.3 調査方法

調査対象者に第一回本調査への回答依頼書を郵送し, Google フォームを使って作成した Web 回答フォームから回答を収集した。加えて, Excel 回答フォームを用意し, Web 回答フォームからの回答が難しい場合はそちらによる回答を依頼した。調査期間は 2021 年 7 月 16 日から 8 月 19 日とした。

### 3.4 調査結果の概要

全体回収数は 83 件 (回収率 37.05%) で, 道内が 28 件 (58.33%), 道外が 55 件 (31.25%) であり, 回収率としては予備調査と同程度であった。うち, Excel 回答フォームでの回答は 2 件であった。以下に, 調査の実施に関する質問を取り上げ, 結果を記述する。

まず, Q10 では, 今回の調査への回答の負担を確認した。結果は図5の通りであり, 負担はあまり大きくなかったと思われる。道内, 道外どちらにおいても「非常にそう思う」と「そう思う」の合計は 80%

を越えていた。

次に, Q12 の調査全般に関する意見を求める質問においては, 「所属校の選択がしにくい」, 「画面遷移がスムーズでない」, 「質問の全体像がつかみにくい」, 「選択式の質問を増やしたらどうか」といった意見が認められた。

「所属校の選択がしにくい」, 「画面遷移がスムーズでない」については, 予備調査後に所属校の質問の回答を記述式から選択式に改めたことに起因している。大学入試センター発行の高等学校等コード表の各学校等を選択肢としたものの, その数が総計 5983 と多く, 選択のしにくさとフォーム全体の軽快さの低下に繋がってしまった。この点については, 次回以降の調査では改善を試みたい。また, 「質問の全体像がつかみにくい」, 「選択式の質問を増やしたらどうか」という点については, 確かにこれらに対応すれば回答をしてもらいやすくなるが, 調査回ごとの目的に照らしながら慎重に判断を行う必要があると考える。

### 3.5 調査報告書の作成

報告書の形式は予備調査のものを基本的に踏襲しつつ, 見やすさ等の点で必要な改善を行った。調査終了から報告書作成までは 1ヶ月半ほどかかったが, 今回で形式がある程度定まったため, 次回以降はもう少し時間をかけずに作成することが可能だと

思われる。

双方にとってのこの調査のメリットを意識しながら、取り組みをしばらく続けていきたい。

#### 4. おわりに

本稿では、大学入試のステークホルダーである高等学校等およびその関係者との良好な関係の構築を目指した調査の立案と実施について報告した。

予備調査の結果、本調査の趣旨について賛同が得られそうなことが分かり、回答時間や調査回数について有益な情報が得られた。また、それらを参考に実施した第一回本調査では、実施上の大きな問題は生じていないことが確認できたものの、さらなる改善点もいくつか見いだされた。

この調査は始まったばかりであり、目的達成のためには、まず定期的な調査としての定着が重要であると考えている。大学入試や高等学校等での教育改善に資するものとなるよう、大学側、高等学校等側

#### 文献

- 高橋康介 (2014), 『ドキュメント・プレゼンテーション生成』, 共立出版
- 文部科学省 (2021), 大学入学者選抜実施要項, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/senbatsu/1346785.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/1346785.htm) (2021年12月30日閲覧)
- American Educational Research Association, American Psychological Association and National Council on Measurement in Education (2014), STANDARDS for Education and Psychological Testing. Washington, D.C.: American Educational Research Association